

国際耕種 25 年の足跡

2009 年 12 月 14 日で国際耕種株式会社が産声をあげてから 25 年の月日が過ぎようとしています。

AAINews 第 61 号でも既に紹介いたしましたように、過去 25 年の間に日本の途上国に対する技術援助の活動には少なからぬ変化があり、その中で我が社の活動も大きく変化してきました。当初、乾燥地域における緑化造林、資源管理、農業農村開発分野における長期専門家派遣が中心だった業務から、海外における研修普及関連技プロや開発調査あるいは国内での技術研修業務そしてアフリカにおける稲作関連業務へとその活動の場を拡大して来ました。

季刊で発行しているニューズレターも当初は社員間の情報共有も兼ねた社内報的なものから、社外への広報を目的として我が社の業務成果や保有技術を紹介するものへと変化して来ました。さらに、この間社員間で話題となった「自然と人間の共生」、「ODA と NGO の連携」、「草の根型協力を考える」、「開発調査の在り方」、「技術協力活動と研修活動の連携」、「日本農業の今と国際耕種の関わり方」といった内容もシリーズもののタイトルとして取り上げて来ました。

また、設立当初 1 名だったスタッフも増減を繰り返しながらも、現在事務員も含めて 11 名に至っています。当初、乾燥地での長期滞在を経験した沙漠かぶれの集団といった感じだったメンバー構成から、営農、栽培、稲作、研修、農村社会、施設園芸、灌漑水利用といった広範な専門分野に対応できるメンバー構成に変わって来ました。そして、会社の業務を推進する中心的立場のスタッフがそうした新しいメンバーに移行しつつあります。

こうした数々の変化を遂げた 25 年間でしたが、この間「真に地域住民の役に立つ活動」、「適正技術の開発と普及」あるいは「適正規模の開発とは何か」ということを常に念頭に置いて、現地関係者との人間関係や信頼関係の構築を大切にしつつ業務に携わってきた積りですし、今後ともこうした精神を貫いて行きたいと思っています。

さて、会社創立 25 周年記念のイベントを兼ねて会社の

ロゴマークを制定しようという動きがありました。社員および関係者からロゴマークを募集し、候補作品の中から投票によって選ばれた最優秀作品を今後会社のロゴマークとして使うことにしました。

選ばれたロゴマーク



三角形二つが「Appropriate」と「Agriculture」の「A」を、長方形一つが「International」の「I」を示しています。また、「土」、「水」、「緑」の三色は乾いた大地に水を満たし、植物を育む緑を示していると同時に、会社の活動分野の三本柱としての「人材育成」、「水」、「農業」をも示しています。

この機会に、ニューズレターの装いも一新することにしました。これまでの読者からの要望や読みやすさ等も考慮して、二段組みで編集することになりました。また、これまでの紀行文 1 ページ、シリーズもの 2 ページ、その他 1 ページといった編成にこだわらず、業務成果や保有技術の紹介記事あるいは新着情報をより積極的に載せて行こうと思いません。今後とも、よろしくお願い申し上げます。

下の写真は今年の春、JICA 筑波センターにおいて野菜栽培コースの研修員達と一緒に満開の桜の下でバーベキューを楽しんだ時のものです。 (大沼洋康)



村落開発ボランティア補完研修への協力

NPO 法人「自然塾寺子屋」は、「地球上の大事な資源を、共生・共存の思想で次世代に引き継いでいく」ことを基本ミッションに、さまざま意欲的な活動を展開されています。JOCV 隊員への技術補完研修も、継続的に実施されている有意義な活動の一つです。今般、取り組まれている平成 21 年度 3 次隊「村落開発隊員」補完研修の参加者は 6 名（女性 4、男性 2）、派遣国もウガンダ、ボリビア、ケニアと多様です。各任地では、村落開発業務とはいえ各隊員とも農業・農村面での利水管理に係ることになりそうで、研修テーマも「水管理」を中心に組まれることになりました。2 週間の研修では、「寺子屋」ならではの「地元の協力」を得ながら、甘楽多野用水土地改良区での見聞や実習なども盛り込み、これまで農業や灌漑に触れることのなかった研修生の実情にも十分配慮したプログラムとなっています。



土地改良区の方から説明を受ける研修生ら

AAI からは、「灌漑一般」講義を担当させていただきました。まず、講義内容を準備する段になって考え込んでしまいました。「今時の若者に[灌漑]?、そもそも[灌漑]の漢字は読めるだろうか?」。「灌漑」は、各古代文明発祥の契機ともいわれるほど、我々人類にとって長く身近な生業でありながら、そして現代でも重要な生存技術でありながら、あまり注目されることはありません。「灌漑」の全貌、そして昨今の実情などをどう説明したらうまく伝えられるか、大いに悩むところです。

「灌漑」は、「農業を行う上では、どうしても追加的に水分調達を行う必要が生じることがあり、それを充足させる一連の人為的活動」ということでしょう。しかし、「だから灌漑が必要なのは当然」としていきなり説明を始めるのはかなり不親切。まず、「作物は、水がなければ生きられない」という自然の大前提から説いた方がよいと考えました。さらにいえば、

何といっても作物の水分補給には「降雨」が基本です。人類は、まず「降雨」現象に適った農業を考えてきました(天水農業です)。そこで「もっと雨量を増やしたい、もっと要るときに降って欲しい」という要求が切実になって、「灌漑」が始まった…、これらの灌漑進展の経緯も強調することにしました。

「灌漑」を安定的に続けようとするれば、水を制御するための何らかの物理的装置が必要になってきます(灌漑システムです)。その際にも、これから「灌漑」を切実に始めたい農家の立場を想像して、まず「自分ならどうしようか」と困ってみる。そうすれば、周辺に在るであろう様々な水資源の可能性やコストに気を配りながら、何戸くらいの農家がどのように参加するシステムにするか、どのくらい便利で安心なシステムにするか、を判断していかなければならないかが実感できるでしょう。そこで、灌漑便益を念頭に置きながら灌漑システムの灌漑規模や整備水準などをどう決めていかに触れた「灌漑の経済学」を説明することにしました。

ところで、経済的には十分妥当とされ造られた既存灌漑システムでも、運営・維持管理で様々な苦勞に直面しているのが現実です。研修講義では、それらの現教訓も聞いてもらいながら、灌漑システムの在り方は、経済的妥当性のみならず、社会的配慮が重要なことにも触れていきました。そして、社会的に健全な灌漑運営を考える場合には、関係農家集団の凝集性の高さなどからより小規模な灌漑システムがさらに有利で、最近では「小規模灌漑システム」に注目が集まっている現状を説明しました。あわせて、灌漑に係る集団行動を持続的に進めるには、参加型アプローチが有用だとする最近の動向にも触れました。

このような流れにそって、灌漑全般に関する今回の研修講義を進めてみました。途中、俄かの夕立ちで、急遽、洗濯物を取り込むハプニングもありましたが、約 2 時間半の講義も、研修生の興味を比較的持続しながら無事終わることができました。社会科学系など幅広いバックグラウンドを有する研修生の方々を対象にすることで、広く「灌漑」全般に配慮することの大切さに気づかされる研修でした。今回の研修講義は、実は我々自身の勉強でもあったと感じているところです。

(松島修市)

はじめに



タンザニア・キリマンジャロ州における稲作

アフリカの包括的な自助努力による発展と政治安定のためには、人口の 70% が収入の半分以上を農業に依存している農村地域の存在を当然無視することは出来ない。アフリカの主食という、トウモロコシを原料としたウガリ、ソルガムやミレットによるクスクスなどを思い浮かべる人もいるだろうが、西アフリカでの稲作は 3000 年以上の歴史をもっている。また、東アフリカでも近年イネの栽培が急速に進んできている。この理由として、コメは栄養価が高く食味が良い、あるいは自給作物にも換金作物にもなり得ることなどが挙げられよう。しかし、稲の収量はアジア地域 (3-3.5ton/ha) と比較しても、アフリカ (1ton/ha 強) では非常に低い。

今日の日本のアフリカ支援は、第 4 回アフリカ開発会議 (TICAD IV) で示された、成長の加速化、人間の安全保障の確立、環境・気候変動問題への対処、という 3 つの重要分野への取り組みを中心に実施されている。このうち、農業分野における支援の中心は稲作である。この背景には、「アフリカの主要穀物 (トウモロコシ、ソルガム、小麦、コメ) のうち需要に供給が追いついていないのはコメと小麦であり、そのうちアフリカの気候条件を見るとコメの方がより生産増に適している」という現実がある。また、日本はアジア地域における稲作栽培技術支援の経験も生かせること、またアフリカ地域ではタンザニアのキリマンジャロ州などで過去 30 年にわたる技術協力の歴史があることも背景にあると思われる。

このような背景をもとに近年、サブサハラ・アフリカのコメ生産を向こう 10 年間で倍増することを目的として、アフリカ稲作振興のための共同体 (Coalition for African Rice Development: CARD) が設立された。CARD ではアフリカの諸条件に適した高収量品種であるネリカ米の普及も含め、「灌漑水田」、「天水低湿地」、「天水畑地」の 3 つの栽培システムにおける適正品種の選定、栽培技術の改善及

び必要な投入 (水、肥料等) の促進等を行うことにより、単位収量の増大を図ろうとしている。現在、CARD では支援対象国の稲作の現状を客観的に把握するための情報収集や、被支援国が実施している稲作開発戦略作成を支援しながら、被支援国の主体性を配慮した支援策の策定の取り組みが進められている。

国際耕種はこれまで多くの農業・農村開発に参画してきたが、その多くは中東、西アフリカなど乾燥地を中心とした活動であった。しかし、2006 年に開始した TBIC での研修コース (陸稲品種選定技術コース) 以後を中心に、以下に示すようなプロジェクトに参加しながらアフリカでの稲作とのつながりを持ってきた。また、陸稲品種選定技術コースでアフリカ稲作支援のための研修を実施する中、サブサハラ・アフリカの稲作を専門とする研修員との交友を深めるとともに、アフリカの稲作に関する情報を蓄積しつつある。

国際耕種がこれまでに関係してきたアフリカ稲作関連活動

プロジェクト名	期間	稲関連の活動
タンザニア・全国灌漑マスタープラン	2001 ~ 2003 年	稲作を主要作物とした灌漑マスタープラン計画の策定、地域レベルでの灌漑計画の支援実証
ウガンダ・ネリカ米適用化計画 / ネリカ米振興計画	2007、2008、2009 年	ウガンダ国作物資源研究所研究員の稲品種試験と品種選定、種子品種技術向上
ギニア国中部・高地ギニア持続的農村開発計画調査	2008 年 ~ 実施中	通年水利用による低投入型灌漑施設の整備、及び地域の環境に適応した作付け類型化の中での稲作栽培
陸稲品種選定技術コース	2006、2007、2008、2009 年	アフリカにおける稲品種普及の基礎となる優良品種選定に貢献出来る人材育成

この新シリーズでは、このようなアフリカ支援の動向を契機として、今後のアフリカ支援の中心課題の一つとなる稲作支援についての我々の取り組みの状況を報告したい。また、このような活動に参加することで我々なりに得てきた教訓を紹介するとともに、アフリカの稲作の課題や今後のアフリカにおける稲作栽培のあり方に我々なりの考え方を発信していきたい。

TBICにおける陸稲コース研修風景



ミニシリーズ

プロジェクト評価を考える <その2>

前回(第 61 号参照)に引き続いて、評価手法について考えてみる。今回は、評価結果から学んで次のステップにつなげる、という点に着目してみたい。そのためのポイントは、「評価」という行為が「評価のための評価」にならないように留意すること、評価で得られた結果を活用して次のアクションを起こすということが重要である。

前回も少し触れたが、人材育成を目的とするプロジェクトではさまざまな研修活動が行われることがあるが、その際に重要なのは研修コースの内容・教材やその効果及び研修を指導する講師(トレーナー)の資質等である。ここでは、具体的な事例を紹介しながら、トレーナー評価や研修評価とその評価結果の活用法について考えてみる。

この事例ではトレーナーの資質を評価するために、20 数項目からなる 5 段階評価表を作成して、研修員及び研修オブザーバーに評価してもらい、結果をレーダーチャートに表した。結果の一部であるティーチング・スキルに関する評価例を図に示した。

トレーナー評価票の例

Evaluation method for trainer performance in giving lecture						
Put * mark in the square which express the skill degree of trainer for each element as follow:						
No	Evaluation element	absent	weak	acceptable	good	excellent
1	Expressing himself well and give welcomes to trainees					
2	Introduction of lecture is stimulating and clear					
3	Showing the objectives of lecture					
4	Showing the relationship between the current and the previous lecture					
5	Preparing handouts of lecture and delivering to the participants					
6	Used the training aids					
7	Preparing the training aids by making ready to use					
8	Used many methods to tempt attention					
9	Giving a chance for trainees to participate					
10	Answered the trainees questions positively					
11	His ability to process the subject of lecture					
12	Expressing about his enthusiasm toward the subject					
13	Asking exciting questions to attract the attention of the participants					
14	His performance refers to his self-confidence					
15	His voice and pronunciation is clear					
16	His explanation is understandable and easy to follow					
17	He gave something new and/or useful to the participants					
18	Facilitating group discussion / workshop in good way					
19	Using body-language (moving communications)					
20	Create a good learning environment within the training program					
21	Emphasis on the important points					
22	Collect the important points together with a rational series					
23	Time allocation to each subject of the lecture					
24	Sharing trainees in the abstracting the lecture					
25	Using questions in order to know the level of understanding of the participants					

チャートは同じ評価項目に対する 2 人のトレーナーの評価結果である。この結果から、2 人のチャートには明らかな差が見られ、チャートの大きさからトレーナーとしての資質の優劣比較ができる。さらに個々のトレーナーのチャートから、各評価項目についてそれぞれの優れた点や弱点を指

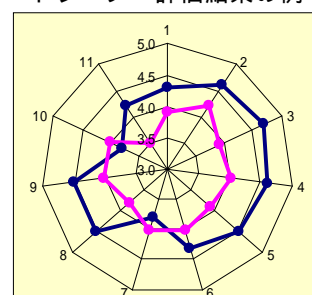
摘することができる。個々のトレーナーにとっても、なかなか自分では気づかない自分自身の長所・短所を他者評価によって知るよい機会になるようである。

このように、トレーナー評価結果から有益な情報が得られることがわかったが、逆にこのように他者との差や優劣が明らかになることによって、点数をつけたり比較することだけにこだわったり、評価そのものが目的になりがちであることもわかった。したがって、「評価のための評価」にならないように、評価で明らかになった弱点を補強したり改善するための「次の段階」が重要である。

「次の段階」として、実際にこのトレーナー評価結果を活用する方法としては、まず個々にコンフィデンシャルに結果を渡して自分の弱点に気づいてもらって次回から注意する、個々のトレーナーとしての弱点補強の個別指導を行う、トレーナー能力向上のための研修やワークショップを実施する、等の方法がある。

さてトレーナー評価と同様の考え方で、研修コース自体を評価することも可能であり、評価票によって点数化したり、レーダーチャート化したりすることによって、結果を「見える化」することができる。研修コース評価の場合も、評価結果に基づく弱点の指摘にとどまらずに、その弱点改善のための「処方箋」を作ること、そしてその「処方箋」にしたがって研修そのものを改善していく努力が、評価という行為と同じかそれ以上に重要である。

トレーナー評価結果の例



編集後記 東京都・神奈川県境に沿って境川が流れています。事務所の近くには「鶺鴒の森」という地名があるように、川沿いの遊歩道を歩いていると羽を干している鶺鴒や、時には獲物を狙うカワセミを見かけることがあります。神奈川県・静岡県境に金太郎伝説発祥の山、金時山があります。御殿場の自宅から山頂まで約 3 時間の行程なので、折に触れ山歩きを楽しんでいます。



今回、登山道脇では咲きはじめたホトギスの花を、尾根道では優雅に舞うアサギマダラを見つけました。こうした身近な自然を守るためにも、地球温暖化対策や生物多様性保全に少しでも貢献できるような仕事に今後とも取り組んでいきたいと思っています。(大沼)